

現代ミャンマー社会における精霊信仰と「公式ナッ」をめぐる言説

関 泰子

— 目 次 —

1. はじめに
2. ナッ信仰と「37の公式ナッ」
3. ポッパ、タウンピョンにおける公式ナッ
「内部の37柱と外部の37柱」
4. タウンピョン儀礼におけるナッ
5. 結論：混沌から見てくるもの

1. はじめに

ミャンマー⁽¹⁾は、タイと並び東南アジアの上座部仏教国を代表する国である(地図1参照)。国土の至るところに点在するパゴダは、その地を訪れる外国人にとってミャンマー国民の信仰心の証のように映る。しかし他方で、「ナッ(nat)」と呼ばれる仏教と習合した精霊信仰が、古代より現代にいたるまで民衆の間に根強く存在する。ナッ信仰はタイの精霊信仰同様、仏教と深く習合しながら存続してきたが、仏教の「近代化」の反面、統治者による仏教への統合が行われず、いわば放置されたままであったタイに対し、ミャンマーのナッ信仰は、ビルマ族支配層による統合と「リスト化」が数度にわたって行われ、その結果ナッ間の階層化が進行すると同時に、その信仰が「ビルマ化」を伴いながら全土に普及していくこ

SEKI, Hiroko 四国学院大学 社会学部 教授

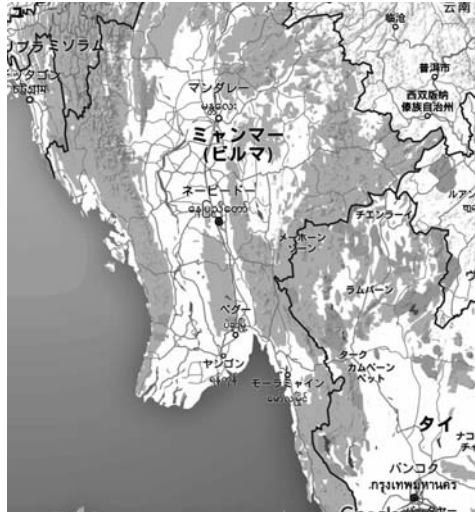
とになった。

ミャンマーのナッ信仰は、上座部仏教以前から存在していたと考えられているが、ビルマ族初の統一王朝であるパガン朝時代に、仏教と習合する「37柱の公式（大）ナッ（official nat）」が制定され、それに次ぐ上ビルマー帯の有名なナッ、特定の地域・民族の信仰を集める地主神・屋敷神、あるいは名もない精霊に複雑に階層化している。

近年の「969運動」⁽²⁾の影響もあり、ヤンゴンの中間層や高学歴層は、このようなナッ信仰を迷信であると否定的に捉える傾向が強いといわれる。

60年代以降各地で実施されたフィールド調査に基づき、民間信仰について研究的蓄積があるタイに比べ、ネ・ウィン体制以降長期間にわたり鎖国体制を敷いてきたミャンマーでは、外国の研究者による自由なフィールド調査は困難であり、ナッ信仰研究に関する空白の期間が長い。例えば、ナッ信仰に欠かせない霊媒ナッカドーは、伝統的に女性が担うものとみなされていたが、現代ではトランスジェンダーな男性のつく職業というイメージが強くなっている。1980年代頃からこの傾向が強くなったといわれているが、いつからどのように変化していったのか、についても不明な点が多い。ゆえにミャンマーにおけるナッ信仰の変化および実践についての研究は、今後の発展が待たれる分野であるといえよう。

タイに比べ、ミャンマーのナッ信仰の特徴は、その定型化した神像イメージにある。パゴダや寺院、町の中心、村のはずれ、道端、田畑のあぜ道、三叉路、海沿い等至るところに祠が建てられ、その中にナッ神像が納められている。人々はその神像のポーズ、乗り物、持ち物でそれがどの神様なのかを知ることができる。これらミャンマーに存在する無数とも言えるナッは、少数民族固有のものも多く、それぞれの関係や属性が複雑であり、ミャンマー人自身も時により混乱するよう



地図1：ミャンマーおよびその周辺地図
(Google Map より引用)

である。場合によっては、土着の名もない神に著名なナツ神の名前が付与され使われることもある。

本稿では、ミャンマーの精霊信仰を語る上で必ず引用される「37柱の公式ナツ」言説とその実態について、従来の地域的差異という理解ではなく「王権による精霊信仰のリスト化」とそれに対する民衆の解釈という視点から考察することを目指す。また、現代ミャンマーにおける「公式ナツ」信仰の変容と存続についても述べたい。

2. ナツ信仰と「37の公式ナツ」

2-1. ナツ信仰の上座部仏教への組み込み

ミャンマー国民、特に多数派民族であるビルマ族にとって宗教的アイデンティティは仏教にあり、宗教生活は仏教行事を優先し、ナツ信仰を迷信と見下げる傾向が存在する。特に高学歴・都市中間層は、ナツに対して無関心であると言われる。しかしヤンゴン住民の居宅を訪問すると、仏壇のある部屋にナツ神像が飾られていたり、飲食店の裏口にナツの祠を見出すことは珍しくない（写真1参照）。ナツ信仰は、特に現世的利益と結びつき、金銭的成功や病氣平癒を願ってナツに祈ることは多い。仏教における宗教実践は来世での成功と結びつくが、現世の欲望を叶えてくれるのはナツであると信じられている。

ジャーナリストであり、19世紀末英領ビルマの行政官の一人でもあった英国人、スコット (J.George Scott) はその著作の中で、ビルマ族が仏教徒なのはその外面においてのみであり、本質はアニミストであると述べている (Scott,1998:389)⁽³⁾。

また、37の公式ナツの存在についても触れており、その構成についての詳細は述べられていないが、中心は悲劇的な死を遂げたマハーギリであり、仏教の神であるダジャーミンも含まれていると記されている (Scott, 1998:391)。



写真1：ヤンゴンの民家に祀られるナツ

ビルマ族におけるナッ信仰が上座部仏教と習合しはじめたのは、初の統一王朝であるバガン王朝時代アノーヤター王治世期（1044-1077）である言われている。バガン朝時代のビルマは、国王により、それ以前から存在していた大乘仏教、密教（Ari Buddhism）から上座部仏教への改宗が大規模に行われる。国王は精霊信仰を弾圧し、仏教を普及させようとするが、民衆の精霊信仰が根強いいため、転じてナッ信仰の管理をしようとするようになる。

この政策の結果、誕生したのが「37柱の公式ナッ」である。この「公式ナッ」は言わば王権によって定められた重要なナッの集合体であり、少数民族のナッを含め、ビルマ族王朝に関係する人物を散りばめた神話を形成しており、この神話の編成と浸透の背後にはバガン王朝内少数民族の「ビルマ化」も意図されていた。田村克己によると、歴代ビルマ王朝の王は仏法王であることを目指してきたが、仏教はそれ自体に力の否定のイデオロギーを含むため、王権を最高の力として映しだすことができない。王権が自らの力を可視化することができるのは、精霊の祭祀を通してだけであった（田村、1993:216）。

2-2. 「37の公式ナッ」

37柱の公式ナットは、後述する1番目のダジャーミン・ナッ以外、「悲劇的な死」を遂げた歴史上実在した人物が神となった存在であることが特徴であり、日本の「御霊信仰」を彷彿とさせる。ミャンマーの主要ナッは、画像として描かれる他、生きている人間のような外見で実寸大で作られることが多い。デザインやポーズ、持っているアイテム、乗り物はそれぞれのナッによって決められている。通常、王族や貴族のように着飾った正装で神格の高さを伝える。

なお、この37柱の公式ナッ・リストは、時の王権によってしばしば構成する神の入れ替えが行われている。田村によると、今日流布している「37柱のナッ」リスト



写真2：ミン・マハーギリ神像と
ココナツ（ヤンゴンにて）

はマンダレーの王朝の大臣が19世紀に編んだものである（田村, 1993:213）。37柱のリストは以下の通りである（池田, 1997 : 132-133⁽⁴⁾）。

A. 37柱の公式ナツ

- ① ダジャーミン・ナツ
- ② マハーギリ・ナツ
- ③ フナンマドー・ナツ
- ④ シュエナペー・ナツ
- ⑤ トウンバンフラ・ナツ
- ⑥ タウンゲーシンミンガウン・ナツ
- ⑦ ミンタヤー・ナツ
- ⑧ タンドーガン・ナツ
- ⑨ シュエノーヤター・ナツ
- ⑩ アウンソワマ・ナツ
- ⑪ ンガーズィーシン・ナツ
- ⑫ アウンビンレーシンビューシン・ナツ
- ⑬ タウンマジーシンニョー・ナツ
- ⑭ ミャウツミンシンビュー・ナツ
- ⑮ シンドー・ナツ
- ⑯ ニャウンジンオー・ナツ
- ⑰ ダビンシュエディー・ナツ
- ⑱ ミンイエーアウンティン・ナツ
- ⑲ シュエスイッピン・ナツ
- ⑳ メードーシュエザガー・ナツ
- ㉑ マウンボードゥー・ナツ
- ㉒ ユンバイン・ナツ
- ㉓ マウンミンビュー・ナツ
- ㉔ マンダレーボードー・ナツ
- ㉕ シュエビンナウンドー・ナツ（別名：シュエピンゲー・ナツ）
- ㉖ シュエビンニードー・ナツ（別名：シュエピンジー・ナツ）

- ②7 ミンダーマウンシン・ナッ
- ②8 パイエインマシンミンガウン・ナッ
- ②9 ティービューザウンメードー・ナッ
- ③0 ティービューザウン・ナッ
- ③1 ミンスィードウー・ナッ
- ③2 ミンチョースワ・ナッ（別名：ゴージジョー・ナッ）
- ③3 ミヤウッペッシンマ・ナッ
- ③4 アナウツミバヤー・ナッ
- ③5 シンゴン・ナッ
- ③6 シンクワ・ナッ
- ③7 シンフネエミ・ナッ

①のダジャーミン・ナッとは、ヒンドゥー教のインドラ神、仏教の帝釈天のことであり、37のナッ世界の王として君臨する。アノーヤター王が民衆間に根強い精霊信仰と上座部仏教を習合させるために、公式ナッ神話の王として設定された。このダジャーミン・ナッだけが、悲劇的な死とは無関係である。

②のマハーギリー・ナッは、ミャンマーのナッの中でも最も有名なナッであり、マハーギリー・ナッに対する信仰は、室内に紐で吊るした椰子の実を飾ることによって示される。ヤンゴン周辺を問わずビルマ族の多くの家では、家の守護霊（エインドウイン・ミン）としてマハーギリー信仰の象徴であるヤシの実を吊るす（池田，1995：204）（写真2参照）。また、マハーギリーの実家が鍛冶屋であったことから、鍛冶屋の守護神とみなす地域もある。4世紀頃実在した人物とされ、伝承によると、鍛冶屋の息子として生まれ、眉目秀麗で剛力の男性であった。彼の人気を妬んだ王が彼を暗殺する計画を立てる。まずマハーギリーの妹を妻にし、妹を騙しマハーギリーを呼び寄せさせ、姿を現したマハーギリーを捕まえ木に縛り付け、生きたまま焼き殺した。兄の死を前にして王の計略に気づいた妹は、炎の中に飛び込み兄の死に殉じる。その後、この兄と妹の霊はこの木に取り憑く悪霊となり、周囲に災いをもたらしたため、王はこの木を切り倒し、エイヤーワーディー（イラワジ）川に投げ込む。流木は下流のパガンに流れ着き、当時のパガン国王の夢枕に兄妹の霊が現れ供養を懇願する。パガン国王は、この流木をポッ

パ山に運び祀った。この時から、マハーギリ―はポッパ山の守り神となる。

37柱の公式ナツの幾つかは、このマハーギリ―の眷属である。③はマハーギリ―の死に殉じたの妹のナツであり、④はマハーギリ―の妻という説がある。⑬と⑭はマハーギリ―の息子たちである。⑮はマハーギリ―の末妹とされる。娘を出産して後、突然死する。⑰は⑮の娘であり、母の死にショックを受け悲しみのあまりに死亡した。ダジャー・ナツを除いた36の公式ナツのうち、7柱はマハーギリ―の伝説に関わる。

次に有名なのは、⑲シュエビンナウンドー・ナツと⑳シュエビンニードー・ナツであろう。この二柱は兄弟であり、マハーギリ―・ナツが守護神として祀られているポッパ山に住んでいたとされる女鬼ポッパ・メードーの息子たちである。パガン朝時代に実在したとされるこの兄弟は、ある朝寝坊して、タウンビョン（マンダレー市郊外の村）に建設していたパゴダのレンガ積み労働を怠った罪で処刑された。㉔マンダレーボードー・ナツは、㉕と㉖の兄弟に仕えていたが兄弟を逃がそうとして処刑された人物であり（中村，2014：5）、㉗シンクワ・ナツは、生前は㉔の妹で、㉔と共に殺害されたとされる。この4柱からなる神々の中心となる㉕と㉖のナツは、ミャンマー北部の村タウンビョンとの縁が深いことから、タウンビョン・ナツとして知られる。現在でも、タウンビョンの村では年に3回、大がかりな祭礼が行われ、ミャンマー全土から信仰する人々が集まる。

また、この公式ナツの選定に携わったとされるアノーヤター王の係累やパガン朝王族出身の神々も存在する。⑩、⑫、⑲、㉘、㉙、㉚、㉛はパガン朝時代の人物であり、特に㉘、㉙はアノーヤター王自身の近親である。

㉜ミンチョースワ・ナツ（ゴジジョー）は、ナツとしての順位は低いが非常に有名なナツであり、現代でも「金運をもたらす神」として庶民の間に絶大な人気がある。どのような時代のどのような人物であったのか複数の説があり、あるいは複数の人物イメージが混ざり合って神として祀られてきたと考えられている。酒飲みの博打打ちで馬に乗る任侠心溢れる人物としてイメージされる。㉕㉖のタウンビョン・ナツとは義兄弟の関係にあるとされ、8月に開催される大祭では、このナツも同様に祀られる。

この他に、⑦、⑨、⑮、㉑、㉒、㉓、㉔はミャンマー北部に成立したシャン族王朝アヴァ王国王族縁のナツとされており、㉕はパガン朝と争っていた隣国ター

トンのモーン族王のナッ、②②はタイ北部ラーンナータイ国のタイ族王のナッである。

⑥、⑧、⑪、⑫、⑬、②②、③③はパガン朝後に成立したタウンゲー朝王や王族のナッであり、パガン朝時代に成立した公式ナッが一部入れ替わっていることがうかがわれる。

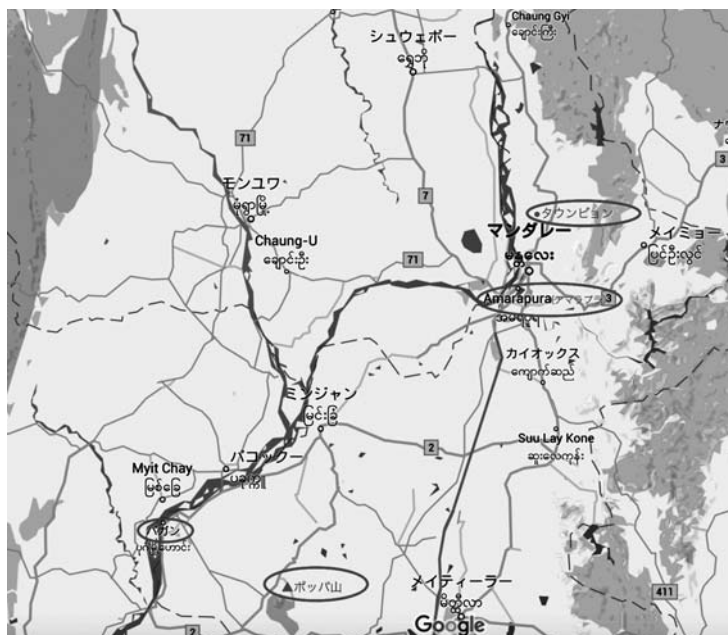
以上、37のナッをグループごとに分類した。中には②④メードーシュエザガー・ナッのように詳細が不明な神も存在し、またいくつかの説が併存する（あるいは複数の人物の伝承とイメージがひとつのナッに含まれている）ケースも存在する。

先程も述べた通り、この37の公式ナッはダジャーミン以外、生前に全員何らかの悲劇的な死を遂げた人物がナッになったものと言われている。この点から、日本の御霊信仰との類似が指摘されているが、庶民には馴染みがあるとは思えない①⑥や②②の異民族の王のナッがリストに加えられていることから、彼らの怨霊化を恐れて祀り上げたのはその時代の為政者であったのではないかと想像される。

3. ポッパ、タウンピョンにおける公式ナッ 「内部の37柱と外部の37柱」

3-1. ポッパ山麓のナットの祠

ポッパ山はパガン南西に50キロメートルほど離れた場所に位置する独特な形状の死火山である（地図2参照）。前章で述べたように、ポッパ山は、公式ナット中最も有名であり、庶民の信仰の対象となっているマハーギリ・ナッが祀られている聖なる山である。ポッパ山はミャンマーにおけるナッ信仰の中心であり、そこに祀られるナッに願掛けをする人々で一年中賑わっている。ポッパ山で最も有名なナッは、ポッパ・メードーと呼ばれるポッパ山の女神（女鬼）とその息子たちである。息子たちとは公式ナットの②⑤と②⑥、シュエビンナウンドーとシュエビンニードーである。伝承ではポッパ・メードーは山に住む女鬼であり、アノーヤター王に仕えていたインド人男性と恋に落ち、この二人の兄弟を生んだとされる。このポッパ山を通して、マハーギリはシュエビンナウンドー、シュエビンニードーとつながる。ポッパ山の信仰の対象であるポッパ・メードーの神像画や立像は、常に両脇に幼い頃の兄弟を立たせた姿で描かれる（写真3参照）。



地図2：バガン、マンダレー周辺地図（Google Mapにもとづき筆者作成）



写真3：
ポッパ山中腹
ナット祠に祀
られたポッパ
メードーと息
子たち



写真4：ポッパ山麓のナット祠と
参拝客

このポッパ山麓の町に、37柱の公式ナットを祀った祠がある。この祠も願掛けに来る人々で一年中賑わっている。祠の奥の祭壇には、生きている人間のように作られ、豪華な衣装をまとったナツ神が並んでいる(写真4参照)。

豪華な衣装を身にまとった37柱の公式ナット像はそれぞれ似通っているが、定型となるデザインがあり、ミャンマーの人々は神々の乗り物や持ち物、あるいはポーズによって容易に判別する。ポッパ山麓の公式ナットの祠では、このようにお決まりのポーズを取り、あるいは乗り物に乗ったナツが立ち並び、人々は入り口のナン・デインから供物や花を買い、ナツ全体あるいは特別に信仰するナツの前に立ち、供物、花、賽銭を捧げ祈りの言葉を口にする。ナン・デインが参拝客の代わりに祈りを捧げることもある。それぞれのナツの立像の前には名前を記したプレートが置かれている。以下、そのプレートに基づき、このポッパ山麓の祠にあった公式ナツを書き出してみたい。(ゴシック体文字は、池田による37柱の公式ナツと重複するナツである。)

B. ポッパ山麓の37柱ナット

- ①バゴーメードー・ナツ
- ②アメージェン・ナツ
- ③シュエガインメードー・ナツ
- ④アメージェージェン・ナツ
- ⑤パレージェン・ナツ
- ⑥コーミョーシン・ナツ
- ⑦ミンビューシン・ナツ
- ⑧マウンボードゥー・ナツ * 前述「公式ナツ」の②①
- ⑨シンニュー・ナツ
- ⑩シュエナバー・ナツ * 前述「公式ナツ」の②①
- ⑪シンビュー
- ⑫マハーギーリ・ナツ * 前述「公式ナツ」の②
- ⑬タウンジーシンマミャラ・ナツ * 前述「公式ナツ」の③?
- ⑭トゥンパンフラ・ナツ * 前述「公式ナツ」の⑤
- ⑮シンフェネミ・ナツ * 前述「公式ナツ」の③⑦
- ⑯ヌムイタウ・ナツ
- ⑰マチャーウ・ナツ
- ⑱ゴードウエレー・ナツ

- ⑱ レーチョウマウンマウン・ナツ
- ⑲ ウービエッタ・ナツ
- ⑳ シュエビンニードー・ナツ * 前述「公式ナツ」の㉔
- ㉑ ポッパメードー・ナツ
- ㉒ シュエビンナウンドー・ナツ * 前述「公式ナツ」の㉕
- ㉓ ウー・ビャウィ
- ㉔ バニョ・ナツ
- ㉕ ミンチョースワ・ナツ * 前述「公式ナツ」の㉖
- ㉖ タラインチョー・ナツ
- ㉗ ピーレービエーナメードー・ナツ
- ㉘ ピーレービエマウンドー・ナツ
- ㉙ ウーシンジー・ナツ
- ㉚ ドラータディー
- ㉛ カーリーメードー・ナツ
- ㉜ マミーレー・ナツ
- ㉝ ラッチャミーメードー・ナツ
- ㉞ マハーペイネ（ガネーシャ）
- ㉟ ゴーギー（ウェイザー）⁽⁶⁾ ①
- ㊱ ゴーギー（ウェイザー）②

前述の「公式ナツ」と構成する神々が大幅に異なることが分かる。田村は「公的ナツ」の神々は、かなりの程度齊一的に共有されていると述べているが（田村, 1993:196）、重複するナツはわずか4分の1である。まずマハーギリ・ナツの息子たちはいなくなり、他方でポッパ山の女鬼である㉑ポッパ・メードー、その夫である㉒ウー・ビエッタ、㉒の兄㉓ウー・ビャウィーが含まれる。また、ミンチョースワの係累が加わっている。㉔シュエガインメードー・ナツは、ミンチョースワの母であり、㉖タラインチョーは妹、㉔バニョはミンチョースワの従者である。他方、ダビンシュエディ王を始めとするタウンゲー朝王家のメンバーも、タイ族・モーン族の王ナツも含まれていない。さらに、ガネーシャといったヒンドゥー系の神や、㉟㊱ウェイザー（後述）と呼ばれる超能力者も含まれ、少々強引な数合

わせという印象を受ける。

1番ナツのバゴー・メードー（女性）は、その名が示す通り、ヤンゴンの東にある古都バゴーの土地神であり、バゴーを中心とした下ビルマー帯で広く信仰されている（写真5参照）。屋敷神のように庭地に祠が建てられることが多い（熊田, 1997:207）。④のアメージェージェンはパガン周辺の農業（水源）や商売を司る女神であり、黒衣がシンボルである。

⑥のコーミョーシンはメイミョー一帯のシャン族が特に信仰する神で、宝石採掘業者に関係の深い神である。⁽⁷⁾⑤のパレージェンはコーミョーシンの妹である。⑦のミンビューシンは白い馬に乗った姿で描かれるナツであり、パガン周辺の集落の道路沿いや田畑の近くの祠でよく見かけるナツである。⑩ヌムイタウは夫の浮気を封じることご利益がある神であり、⑪⑫⑬は、子供の開運を助ける神であるという。⁽⁸⁾⑭⑮は兄妹であり、やはりシャン州のナツである。



写真5：ポツパ山麓ナツ祠のバゴー・メードー（左端）と他のナツ神

⑯ウー・シンジーもエイヤーワーディー川デルタでは有名なナツである。豎琴を抱えて座る姿で描かれることの多いウー・シンジーは、海神に愛され海に身を投げたというその由来から船を守る神として、海沿いにその立像が建てられることが多い。また、タイ南部、ミャンマー東南部の漁民が船の舳先に布を巻き信仰する船霊を、タイ漁民は「メー・ヤー・ナーン」と呼び、ミャンマー漁民は「ウー・シンジー」と呼ぶ。⁽⁹⁾⑰⑱⑲はインド、ヒンドゥー起源の神である。全体的に王族系統ナツがいなくなり、古くから民衆の信仰の対象となっていた神々が集められている。

熊田直子は、この37柱の公式ナツについて、「37柱のナツのリストの中にどのナツを入れるかは、時代、場所、人によって異なり、必ずしも一定していない。」と述べている（熊田, 1997:207）。田村も、調査村の村人が「37柱のリスト」の存在を知っているものの、個々の精霊についての知識は乏しく、一つのまとまりとして知っているに過ぎないと記述している（田村, 1993:210）。しかし、このポツ

パ山麓の祠のナン・デインの女性は、この祠に収められているナツが「正統な37柱の公式ナツ」であると主張する。さらに、ここに収められているナツは「内部の37柱ナツ」であり、違いがあるとすれば、筆者らが把握している冒頭の37ナツは「外部の37柱ナツ」だからであろうと述べた。

確かに、ナツ信仰の中心地であるポッパ山麓のナツが、公式ナツでないのであれば、一体どこのナツが公式なのか、という問いは至極当然であろう。しかも、こちらのナツの顔ぶれは、ポッパメードーを始め、バゴーメードー、アメージェン、ミンビューシン、ウーシンジーとビルマ族に馴染みの深いナツが揃っている。「御霊信仰」に基づくナツであるとすればなおさら、民衆が怨霊化を恐れ畏怖の対象とするのは、異民族の王より、王権によって命を落とした英雄たちではないであろうか。では、一体、どちらが「正統」なのであろうか。答えを出す前に、ポッパ山麓ナツ祠ナン・デインの語る「内部の37柱」「外部の37柱」とは何なのか、次章でみていく。

3-2. 「内部の37柱」「外部の37柱」

池田によると、ミャンマーの37柱ナツは3つの系列に分かれている⁽¹⁰⁾。それは、(1) ボウダバータ（仏教）・37ミン、(2) アトウィン（内部）・37ミン、(3) アピン（外部）37ミンであり、前章で紹介した「37の公式ナツ」は、この(3)アピン（外部）37ミンに相当すると考えられる。しかし、(3)アピン（外部）ナツでは、一番目はダジャーミンではなくマハーギリーとなり、ダジャーミンは、(2)アトウィン（内部）・ナツの第一番目となる。

歴史上の人物に由来するナツは、「アピン（外部）37（トンゼコンナ）柱（ミン）」と呼ばれ一つの系列に整理され、ダジャーミン（帝釈天）、ダタラッタ（持国天）、ヴィルーダカ（増長天）など四天王その他のインド伝来の天神・守護神が「アトウィン（内部）」の系列に、そしてパーリ仏典中に出てくるインダ（因陀羅）、ソーマ（蘇摩）、ヴァルナ（婆留那）などの夜叉たちは「ボウダバータ（仏教）・ミン」系列に入れられ、合計三系列のパンテオンに序列化したリストが作成されている（池田，1995：208）。この「アピン（外部）」と「アトウィン（内部）」の区別は、前述のアノータター王がナツ信仰を禁じた際に、仏教の守護神になるようにと、パガンのシュエズイーゴン・パゴダ境内から各地から集

め合祀したものが「アトゥイン（境内の意）・ナッ」で、それ以外が「アピン（境内の外の意）・ナッ」であると言う（池田，前掲書：209）。

では、ここに列挙された「アピン37ミン（外部の37ナッ）」にはどのようなナッが含まれているのか、池田のリストにしたがって列挙する。

C. アピン（外部）37ナッ（ゴシック体は冒頭のA. 公式37ナッと重複するナッ）

- ①マハーギリ
- ②タウンジーシン
- ③シュエナベー
- ④トンバンフラ
- ⑤ミンコンジー
- ⑥ミンタヤージー
- ⑦タンドウカン
- ⑧シュエノウヤター
- ⑨アウンソワーマジー
- ⑩ガージーシン
- ⑪セインビューシン
- ⑫タウンマジー
- ⑬ミョウミン・シンビュー
- ⑭シンドー
- ⑮ニャウンジンオ
- ⑯ダビンシュエティー
- ⑰ミンイエアウンティン
- ⑱シュエスイティン
- ⑲マウンポートウー
- ⑳メードウシュエサガー
- ㉑ユンブィン
- ㉒マウンミンビュー
- ㉓マンドレーボードウジー
- ㉔シュエピンジー

- ②⑤ シュエピンゲー
- ②⑥ ミンダーモンシン
- ②⑦ ティーピューサウン
- ②⑧ タードウミンカウン
- ②⑨ メードウシュエエインシー
- ③⑩ ミンシッドウ
- ③⑪ ボーミンジョウ
- ③⑫ ミョウベシンマ
- ③⑬ アノウミバヤー
- ③⑭ シンコン
- ③⑮ シンクワ
- ③⑯ シンネミ
- ③⑰ コーチャウンダガー

※同じナツであるが表記が異なるものは、そのまま引用している。

ナツは、複数の呼び名をもっており、さらに日本語表記の違いもあり、ややわかりづらいが、冒頭の公式ナツやポップ山麓の祠の37ナツとは異なるナツが幾つ含まれていることが分かる。また、公式ナツの一番目であるダジャーミンはこの外のナツ群には含まれず、内部のナツ群の一番目とされている。

池田氏は、これら「内部のナツ」「外部のナツ」の使用には、時代による変遷や人々の認識の相違が見られると述べているが、では先に池田氏が述べたダジャーミンを含む公式ナツは、「内部のナツ」「外部のナツ」のいずれなのであろう。

スパイロ(Melford E. Spiro)は、ビルマ族に流布する「内部ナツ」「外部ナツ」という概念について、その説明が話者によって異なることを指摘する。あるインフォーマントは「内部の37柱」は王家によって選ばれ国王に認証されたナツからなり、それに対して「外部の37柱」はいかなる時代の王家のリストにも含まれないナツと説明したが、別のインフォーマントは異なる説明を行ったと述べている。スパイロは、37ナツを構成する神々について列挙していないが、内部ナツも外部ナツも暴力的な死を遂げた人物からなる点は、各インフォーマントに共通していると述べている (Spiro:1996:52)。つまり、スパイロによる「外部ナツ」と「内

部ナツ」の説明は、「内部ナツ」を仏教の神とする前述の池田氏の記述と異なる。37の公式ナツについての説明は、このように「内」「外」というサブ概念も含み、記述者によってかなりの相違が存在する。

先ほどのポップパ山麓のナン・デインの話に戻りたい。ナン・デインの女性は、ポップパ山麓のナツは「内部の37ナツ」であると述べた。しかし、「内部のナツ」は、池田氏によると、ダジャーミンや四天王を中心としたインド伝来の神々からなる。しかし、例え「外部のナツ」の言い間違いであるとしても、先に述べたように、その構成ナツはポップパ山麓のナツとはかなり異なっている。熊田氏や池田氏が指摘するように、37の公式ナツの構成は、内部ナツと外部ナツという系列の概念を用いたとしても、やはり地域による違いがあることは間違いない。しかし、ここで重要なのは、ナン・デイン自身は、構成ナツの相違を「地域差」によるものと考えていない点である。代々続くポップパ山麓の祠に集められたナツこそ「正統な」37のナツであるという。そして、有名なシュエビィンナウンドー、シュエビィンニードー兄弟の母であり、ナツの総本山とも言える聖地ポップパ山の女神であるポップパ・メードーが含まれていないのはおかしいとも考えている。

それでは、他のナツ信仰の盛んな地域では、「公式ナツ」のことをどのように捉えているのだろうか。タウンピョンはミャンマー第二の都市マンダレーの北、約14キロメートル離れたところに位置する村である（地図2参照）。マンダレーは、ミャンマー第二の都市であり、かつコンバウン朝最後の首都（1860年-1885年）である。第3次英緬戦争を経て英国植民地になるまで、ビルマ最後の王朝の都であった。タウンピョンはポップパ同様、ミャンマーにおけるナツ信仰の中心地として知られる。域内に約7000のナツの祠があると言われる。特にその地で毎年8月に開催される大きなナツ・プエ（精霊の祭）は、ミャンマー全土から多くの観光客、信仰者を集める。ここでの祭祀の対象となるナツは、ポップパ・メードーの息子たちであり、公式ナツにもポップパ山麓ナツにも含まれるシュエビィンナウンドー、シュエビィンニードー兄弟である。

一般にタウンピョン・ナツとして知られるこの兄弟精霊は、戦士的性格を有し、「37柱のナツ」の中で最も強い力を持つという（田村、1993：204）。この兄弟ナツをめぐる伝説は、年代記に記録され、コンバウン朝時代、祭祀が王室からの供え物を受けるなど、「国の祭祀」とみなされていた（田村、1993：198）。さらに、

ミンチョースワ・ナツはこの二兄弟の義兄弟ナツとみなされており、タウンピョンでは、このミンチョースワ・ナツも非常に人気があり、兄弟ナツと同様に熱心に祀られている。言わば、タウンピョンはポッパ山と並ぶナツ信仰の聖地であり、マハーギリ・ナツは多くの世帯や店舗で祀られているが、一番信仰されているのはこのタウンピョン・ナツやミンチョースワである、とタウンピョンの人は言う。

タウンピョンにある兄弟ナツの墓所を守るナン・デインの男性（69才）は、公式ナツについて以下のように説明する⁽¹¹⁾（写真6参照）。

「ナツには、内部の37柱（アトゥイン・トンゼコンナ・ミン）、外部の37柱（アピン・トンゼコンナ・ミン）、その他の37柱（アウォン・トンゼコンナ・ミン）がある。内部の37柱には、ダジャーミンを始めとしたレベルの高い神様、ゾーギー、ウェイザーが含まれる。外部の37柱には、マハーギリやタウンピョン・ナツ、ポッパ・メードー、アメイエージェン、バゴー・メードー、ウー・シンジーなどが含まれる。バガンの37柱は外部の37柱である。この3系列37柱、合計101のナツが重要なナツである。」⁽¹²⁾

この男性のナツを3つの系列に分ける説明は、前述の池田による説明に近い。しかし、その構成ナツの解釈は、いくつかの点で池田の記述と異なる。例えば、外部の37柱として挙げたナツは、ポッパ山麓のナツ構成とほぼ同じであることが想像されるが、流布している冒頭の公式ナツとは異なる。さらに、内部の37柱には、ウェイザーが含まれている。

ウェイザーとは、「特別な修行を通じて超自然的な力を持つに至った人物」を



写真6：タウンピョンにある、兄弟ナツの墓所。祭礼中は占い師たちが臨時で店を出し、人々が熱心に聞き入っている。左端の椅子に座った男性が墓所の管理人。

指す（土佐, 1997: 189）が、ミャンマーでは、精霊信仰のようにこのウェイザー信仰も仏教の中に組み込まれている。土佐桂子によると、ウェイザーを信じる人々も仏教徒であり、ウェイザーを仏教の神格の一つとして拝んでいるという（土佐, 1997: 192）。ナッには否定的な都市部の人々の間でも、ウェイザー信仰は受容されているとも言われる。実在したウェイザーとして有名なボーボーアウンやボーミンガウンの像は、ヤンゴンやポッパのあらゆるバゴダやナッ祠に祀られている。彼らは仏像やナッ像同様に、ろうそくや花、供物を供えられ、人々によって熱心に信仰される。ウェイザーには、(1) 修行によって身につけた知識や術、(2) 秘技を持つ、(3) 超自然的な力を有する、(4) 不老不死、(5) 仏教的帰依、の5つの特徴があり、現在でもウェイザーになったと噂される人物は慕われ人々が周りに集まり、その人物を中心にガインという集団を形成する（土佐, 同上）。ボーミンガウンは1950年代まで生存していた現代のウェイザーであり、ポッパ山では、ポッパメードー・ナッと並び称されるほど有名な人物である。ポッパ山頂には、ボーミンガウンを祀った祠があり、ナッ同様人々の信仰を集めている（写真7参照）。



写真7：ポッパ山山頂にあるウェイザー、ボーミンガウンの祠。ナッ同様に人々の信仰を集めている。ボーミンガウンはポッパ山で修行を積み、この地で亡くなった。人々は彼が臨終を迎えたというベッドのへりに手をかけ、願掛けを行う。

つまり、このナン・デインの男性の解釈では、内部の37柱は現代のウェイザーまでも含む、現在進行形（つまりこれからもメンバーの交代がありうる）のリストとなる。

池田は、ミャンマーには「歌い方37」「踊り方37」「護衛術37」と言うように、37という数でまとめることを好む考え方があると述べている（池田, 1995: 208）。つまり、日本で言う「七福神」のように、まず37という数に意味があり、その数

だけ神様を揃える、というこだわりが根底にあるようだ。同様に、「101」のナツ、という場合もその「101」という数が重要なのだと想像する。また中村羊一郎は、このミャンマー文化における「37」という数値へのこだわりを、ヒンドゥー仏教の世界観で重要な「4」の倍数である36に仏教の守護神であるダジャーミンを加え37にしたと述べている（中村, 2014: 3）。

スパイロは、パガン朝起源と伝えられているこの「37の公式ナツ」を構成していた元々の神々の多くは消滅し、他方でその時代に名の知れ渡ったナツが宮廷により後世に付加されていると述べている（Spiro, 1996:52）。「公式ナツ」の最終リスト作成はボドーパヤー王治世期（1782-1819）に行われ、この時期に17世紀のナツが付加された（同上）。またスパイロは、ビルマ族の人々の中にこの古典的37ナツを列挙出来る人は殆どいないが、彼らはこの「公式ナツ」を「範疇」として考えているので、構成する神々を覚えて列挙することはないとも述べている。

小松和彦は、日本における「七福神」信仰は、「七」をまとまりとする考えかたにしたがってなされたものであり、恵比寿、大黒天、毘沙門天の3神以外の残り4神については異論もあり、実際に当初は構成する神にも若干の異同が存在したと述べている（小松, 2009: 44）。小松の指摘を参考にしつつ考えていくと、「37の公式ナツ」には、宮廷により何度か標準化されたリストが存在しながら、民衆にとっては、自分たちが信仰するナツが「37のナツの一つ」であることを確認することに意味があり、標準化された37柱を揃えることにはあまり関心がないのではないとも考えられる。しかし、自分たちが信仰するナツが「パガン朝由来の」「公式ナツ」に含まれており正統的な存在であると考えすることは、彼らの信仰にとって必要欠くべからざる要件であり、他方で、互いの信じる「公式ナツ」同士の相違を説明する概念として、「外部」「内部」という系列が利用されると考えるべきなのではないだろうか。

元々精霊信仰には文字化され標準化された教義があるわけではない。言わば民衆の信仰と共にある。宮廷が公式ナツを定め、あるいは改定しても民衆の信仰とそぐわなければ、民衆は親しみがありかつご利益があると信じる神を祭り続ける。ポップ山の公式ナツにタウングー朝の王族が含まれないのは、民衆にとってタウングー朝由来のナツは馴染みのない存在であったからとも考えられる。

4. タウンビョン儀礼におけるナツ

前章で述べた通りポッパやタウンビョンのナン・デインの言葉は、「37柱の公式ナツ」の標準形を受け入れるのではなく、自らが信仰するナツを「37柱の公式ナツ」と見なすことによってその正統性を主張しているように思える。パガン時代から脈々と続く神々であるということは、彼らの信仰する神々の神格を証明することに繋がる。内部の権力闘争を繰り返しながら、長期間に渡り続く軍事政権による国家は、彼ら民衆と直接つながる存在ではなく、彼らにとっての「正統性」の根拠は、植民地化以前の王国時代なのではないか。

2015年8月のタウンビョンは、押し寄せる観光客、現世の利益を願う人々で溢れかえっていた。小さな村にぎっしりと詰まった群集の熱狂の中に身をおくと、ミャンマーの人々のナツ信仰の根強さを改めて実感する。

タウンビョンの祭は年に3回催され、それぞれ兄弟が隣国タートンに遠征に出発した日、戻った日、鎮魂の日に相当する（中村, 2014: 5）。このうちビルマ暦ワカウン月と呼ばれる、5日間ほどの8月の祭祀が最大の祭となる。このワカウン月はタウンビョン・ナツと同じくらい人気のナツであるミンチョースワー・ナツが兄弟に会いにやってくるとされ、「福の神」ミンチョースワーを信仰する人々、財運を分けてもらおうと願う人々、祭の熱狂を求める人々でごった返す。観光客にも、ミャンマーの伝統的な祭として紹介されていることもあり、訪れる人々は年々増加の一途である。しかし、筆者が訪れた2015年8月24、25日の2日間、外国人観光客を見かけることは少なく、ほとんどがミャンマー各地から集った人々であった。

タウンビョンに向かう沿道では、周辺の村人たちがパゴダ建設のための寄進を求めて並び立つ。背後の巨大なスピーカーアンプからは、タウンビョン・ナツやミンチョースワー・ナツを讃える軽快なダンス音楽が流れている。そのダンス音楽に合わせて踊りだす人々もいる。タウンビョン・ナツに供物を捧げる儀礼のさなかにある祠では、中に入れない参拝客のために、液晶大画面モニタを入口に設け、中で行われる儀礼を中継する。ミンチョースワーの祠では、ナツを讃える音楽に合わせてナツカドー⁽¹³⁾がチャット紙幣をばらまく。信奉者も用意してきた札束をばらまく。興奮した見物客は、ばらまかれた紙幣を奪い合う。

祭事中は村の中に一区画ごとに仕切られた臨時の長屋が建設され、ミャンマー全土から集まった職業的ナッカドーたちが、祭礼の期間中この部屋に間借りする。ナッカドーたちは、それぞれ自分の信仰するナツと儀礼的に「結婚」しており、そのナツの生涯をストーリー化した舞を舞う。ここに集うナッカドーはタウンピョン・ナツやミンチョースワーと「結婚」した人々である。

ナッカドーたちは祭礼の期間中交代で一晩中舞を奉納するが、期間中行われる「大臣と王妃」のような大きな儀式では、踊りの順序と内容には意味がある。まずダジャーミンの踊り、続いてマハーギリとその眷属の踊り、マンダレー・ボードーの踊りが続き、そしてその次にミンビューシンの踊り、兎にまつわる踊り、パガン朝アノーヤター王の踊りが続き、最後にタウンピョン・ナツの踊りとミン・チョースワーの踊りで締めくくられる（中村，2014：9-10）。

興味深いのは、この踊りに登場するナツの顔ぶれである。37柱の公式ナツを率いるダジャーミン、そしてマハーギリの踊りに続いて、タウンピョン・ナツの兄弟に生前尽くしたとされるマンダレー・ボードーの踊りが舞われる。そして、公式ナツを編纂したと言い伝えられるアノーヤター王、主役のタウンピョン・ナツと義兄弟ミン・チョースワーの踊りで儀式が締められる。注目されるのは、これらの儀式的真ん中に舞われるミンビューシンである。37柱のナツのリスト編者のアノーヤター王を除くと、ミンビューシン・ナツは唯一、冒頭の公式ナツに含まれないナツである。しかし、ポッパの公式ナツには含まれている。

ミンビューシンは白馬に乗った若い男性の姿で描かれ、上ビルマでは馴染みの深いナツである。パガン周辺を歩くと、道路沿い・田畑沿いに祠が建てられている（写真8参照）。

スパイロによると、ミンビューシンは上ビルマにおいてよく見られる村の守護神であり、しばしば村人にボーボーギー（写真9参照）と混同されている（Spiro, 1996 :85,94-95）。生前は、白い馬に乗った賭け事好きの男性で、ある夜の日、賭け事の帰り道に水路に嵌まり溺死しナツになったという（Spiro, 1996:95）。

このタウンピョン・ナツの祭礼期間終了後に、ヤタナグで同様なナツ儀式が行われる。ヤタナグは、マンダレーの南約11km、アマラプラに位置する。アマラプラは、コンバウン朝王が、マンダレー遷都を決めるまでの10数年間、都に定めていた地である（地図2参照）。このヤタナグが聖地とされるのは、ここでタウンピョ



写真8：パガン郊外の農村地帯に建てられたミンビューシンの祠。



写真9：町の守護神としてのボーボーギー（南部の都市ベイにて）高齢男性の姿で表される。

ンの兄弟の母ポッパメードーが亡くなったとされるからである（中村，2014:19）。息子たちに会いに行きポッパ山に帰る途中で息子たちの死を知り、傷心のあまり亡くなった地なのだという。このヤタナグのナツ儀礼では、ポッパメードー・ナツ、タウンビョン・ナツの他に、コーミョーシン・ナツを祀る儀礼が行われる（中村，2014:21-22）。コーミョーシンは前章で述べたとおり、元々はシャン族が信仰していたナツであるが、パガン・マンダレー周辺では馴染みの深いナツである（写真10参照）。



写真10：パガンのレストランに祀られたコーミョーシンとその妹のナツ

ミンビューシン、コーミョーシンは、冒頭に述べた「37柱の公式ナツ」には含まれないが、ポッパ山麓の「37柱の公式ナツ」に含まれている。

マンダレー周辺のナツ儀礼について考察すると、儀礼を担う当事者たちにとって、「公式ナツ」とは何を意味するのか、という疑問に突き当たる。「37柱の公式ナツ」は度々構成ナツの入れ替えが行われ、現在普及しているのは、マンダレー時代に編成されたものであることは前に述べた。タウンビョンやヤタナグ、ポッパ山で祀られているナツは、それ以前の古い編成に基いている可能性も十分ありうる。しかし、そうであるとすれば、「正統性」とは何なのであろうか。むしろ「正統性」を維持するのは、19世紀後半以降ナツの普及版ではなくて、これら儀礼を担う集落の人々ではないだろうか。

5. 結論：混沌から見えてくるもの

以上、「公式ナツ(official nat)」と呼ばれながら、精霊信仰の中心地においても、その構成は「標準」とはかけ離れたものであること、またその「理由」としての人々の説明も、多くの相違点を含むことを明らかにした。では、「公式ナツ」を構成するナツは、なぜこれほど違うのであろうか。この問いへの答えを探す前に、まずミャンマーの人々にとって「37柱の公式ナツ」とはどのようなものなのか、ということを考えたい。序論で述べたように、ミャンマーにおけるナツ信仰は現代においても盛んである。少なくとも人々の中に意図的に排除する動きは見られない。上座部仏教が浸透し始めた時代からの習合であるため、仏教の宗教実践の一部と考えられている側面もある。タウンビョン・ナツ儀礼では多くの仏教僧を見かけ、また儀礼に仏教僧が参加する場合もある。人々にとって精霊信仰は現世の利益を追求する欲望に結びつく。激しく変動する現在社会であるからこそ、なおさら精霊信仰への熱狂は強くなる。つまり、仏教における宗教実践では求められない人々の不安や欲望を吸い取る装置として精霊信仰は続いているのである。

「37柱の公式ナツ」にどのナツが含まれているのかは結局さほど重要なことではないと筆者は考える。しかし、それは人々が自らの信仰するナツが「公式」かどうかを問題にしていないということではない。自分たちが信仰するナツがこの公式ナツに含まれる、由緒正しい霊験あらたかな「御霊」であることを内外に確

認することは重要である。七福神にとって恵比寿、大黒天に毘沙門天が欠かせないとしても、その3神だけではなく7柱の神を必要とするように、ミャンマーの民衆にとっては、彼らの信仰するナッが37柱に含まれているということが大切なのであろう。そしてそれは、公式ナッの「地方的差異」とはみなされない。もし自分たちが信仰するナッが含まれる「公式ナッ」が「地方版」にすぎないのであれば、そのナッの神格が「下がる」からであり、そのための方便として「外側」「内側」という系列概念が用いられるのではないだろうか。「公式」ナッであることは、現代においても人々の信仰と熱狂を維持するために必要な「正統性」の根拠なのだ。

中村は、タウンビョンの兄弟が王の怒りに触れ、捕縛され鞭打たれ刑死したという伝承の中で、捕縛用の縄を差し出した村、刑に使う竹の鞭を提供した村などタウンビョンの北方に位置する村の村人たちは、タウンビョン兄弟の怒りにふれるため、現在においてもタウンビョン祭祀に参加しないと述べている（中村、2014：16）。人々の中では、タウンビョン兄弟の伝承はいまだに続いており、タウンビョン村の人々が祭祀をもってナッ信仰を正統と見なすように、北方の村人たちへの禁忌も、タウンビョン・ナッの高い神格を正統化するために守られる。タウンビョン・ナッの神話は現代でも続いているのである。中村は、このタウンビョン兄弟の祭祀と、同時期に近隣のヤタナグで行われるポッパメードーの祭祀について詳細な記述を行っているが、これらの祭祀が成立したのはあまり古くない時代であろうと推察し、ミャンマー各地で実施されるナッ祭祀の類似性から、タウンビョンの祭祀が定型化し拡散している可能性を提起している（中村、2014：29）。古代とのつながりを強調する「伝統的」祭祀は、むしろ近代社会にこそ必要とされるものなのではないだろうか。

ナッカドーの舞を中心としたナッ神殿で繰り広げられる祭祀と大音量の音楽に合わせて神殿の内外で踊りだす人々、ナッカドーや信仰者が撒き散らすチャット札とそれに群がる群衆を見ていると、ナッ儀礼は、長期化した軍事政権下で人々が共に熱狂する祭礼の少ないミャンマーにおいて、民衆に貴重な「ハレ」の機会を提供してきたことが想像される（写真11および写真12参照）。「公式ナッ」はこうした人々の熱狂を支えるために不可欠な概念的装置なのだ。

田村はかつてこのタウンビョン祭祀を「見えない国家」を作りだしてきたと評



写真11：2015年8月25日、大祭当日に
タウンビョン村内神殿前に集う人々

した（田村，1993:217）。「国の祭祀」が映しだすべき王権が失われたミャンマーにおいて、この祭祀が意味するものを問うている。しかし、念入りに旧王朝のメンバーや異民族王を除外した37柱を「公式ナツ」として祀る、言わば民衆によりカスタマイズされた「37柱の公式ナツ」の存在は、民衆の求める「37柱のナツ」の正統性が必ずしも為政者側のリスト化の意図と軌を一にするものとは言えないことを示唆しているように思える。確かに民衆の「公式ナツ」に関する知識は断片的で食い違いが多い。しかし、彼らの世界観に基づき「公式ナツ」は再編成され、彼らの「見えない王国」に結びつこうとする強かさを持ち合わせている。

また、筆者はかつてタイ・ミャンマー、両地域にまたがる船霊信仰について考察したが、タイの精霊信仰が為政者によって仏教と意識的に習合させられたり、



写真12：ナツ儀礼中の神殿内部に入り
きらない人々のために入口に設置され
た儀礼中継用液晶テレビ

特定精霊の王室による「認証」が行われなかったため、精霊信仰の「仏教徒タイ化」は免れた。タイ南部のムスリム漁民や少数民族の間にいまだに船霊信仰が残り、それが仏教徒同様に「メー・ヤー・ナーン」と呼ばれ続けるのは、こうした経緯によるものと考えられる。他方、対岸ミャンマーのムスリム漁民が、船霊を信仰しつつ、ビルマ族ナツとして「ウー・シンジー」と呼ぶ習慣を持たないのは、やはりナツ信仰のビルマ族王権による管理と無関係ではないと考えられる。ビルマ領土の拡大に伴い、ビルマ族は征服した土地の名もない土着の神にビルマ・ナツの名称を与えてきた。木舟の舳先に巻いた二色の布で象徴表現される船霊をエイヤーワディー河沿岸の漁民は、「ガンジーシン」、⁽¹⁹⁾アンダマン海沿岸漁民は「ウー・シンジー」と呼ぶ。共に上ビルマ地方と縁の深いナツであるが、元々は同じものであると考えられる。

ここ数年の開放政策により、ミャンマー東南部の都市ダウエーに進出してきたタイ系企業が建物敷地内に建てた土地神・屋敷神が、ダウエーの住民の反発を招いているという。⁽²⁰⁾ナツ信仰は衰退していると言われるが、こうして異文化との接触は、新たなナショナルな「精霊信仰」へのこだわりをもたらす可能性も含んでいる。「我々の神」なのかそうでないのか、という問いかけは、王権との繋がりより、むしろ現代的ナショナリズムと結びついていくことを示唆しているように思える。

本論文は、科学研究費補助金（基盤研究B）「東アジアにおける宗教的シンクレティズムの社会学的研究－日本・中国・東南アジア」（研究代表者・関泰子）により2015年8月22－8月29日ミャンマーにて実施されたフィールド調査に基づく。

論文執筆にあたり、公式ナツに関する貴重な資料と助言を下された天理大学国際学部・野津幸治教授、現地調査での音声データの採集・テープ起こし作業を担ってくれた香川大学経済学研究科修士課程1年、倉田健太君そして、ミャンマー語表記と意味について助言を下されたKhin SanYeeさんにこの場を借りて御礼申し上げたい。

注

- (1) 本論文では、国名表記については「ミャンマー」を使用し、特定のエスニック・グループについて述べる場合や歴史的な記述を行う場合は「ビルマ」を使用する。また「上ビルマ(Upper Burma)」「下ビルマ(Lower Burma)」という伝統的な地域区分はそのまま使用する。
- (2) 969運動とは、現在、ミャンマーの仏教徒の間で盛んになっている一種の仏教改革運動である。仏教の三宝（ブッダの9徳、法の6徳、僧伽の9徳）を掲げ969運動と名付けられている。運動の指導者である仏教僧のアシン・ウィラトゥ師が、ミャンマー国内における反イスラム運動の急先鋒であることや、この969運動が、コーランに基づきムスリムの掲げる聖なる数字「768」に対抗しているとされることがから、諸外国からは過激派仏教徒の民族主義運動と批判されることが多いが、実際には、ミャンマー国民の中には、功德や瞑想を通して仏教における宗教実践を見直す、つまり現代の仏教改革（純化）運動ととらえる見方もあるようである。
- (3) この書籍は1921年に出版された版の復刻版であるが、初版は1906年である。
- (4) ミャンマー語からの日本語訳が元になっているため、研究者により表記が異なる。また、各ナツには複数の呼称が存在し、どの呼称を採用するかについても研究者により若干の相違が見られる。池田氏も論文により若干表記が異なるため、本論文では表記を統一した。
- (5) ナットの祠の管理人。田村克己によると、祠の管理者ナン・デインは、原則として精霊の守りにあたる女性ナツ・テインの兄弟が担当するという（田村, 1993:206）。しかし、筆者の調査時のこの祠の管理人は30才の女性であった。彼女は参拝者の要望に応じて、ナツに供物を捧げ、参拝者の代わりに祈りの言葉を捧げる。ナン・デインとナツ・テインを兼ねていると思われる。
- (6) ㊸と㊹は固有名詞のない二人組であった。
- (7) 中村, 2014 : 22。
- (8) 2015年8月23日、ポッパにおける聞き取りによる。
- (9) 詳細は、関泰子, 2014, 「タイ南部の船霊信仰」『立命館国際研究』26(4),143-166 参照のこと。
- (10) このナツの三系列の分類は、Encyclopedia Birmanica Vol.6 pp.129-130 に基いている。
- (11) 田村によると、タウンピョンには37の公式ナツ全ての小祠が存在すると言う。しかし、その37のナツに祀られている個々の神についての言及はない（田村, 1993 : 219）。
- (12) 実際には、37ずつ3系列のナツを合計すると101ではなく111となる。偶然なのか、ポッパ山

- 麓のナン・デインもタウンピョンのナン・デインも「101のナツ」と述べた。しかし、実際には、「111のナツ」であり、タウンピョンのナツ祭祀を観察した中村は、ワカウン月第8日の祭りにおいて、大臣に扮した男性ナッカドー8人、王妃に扮した女性ナッカドー4人が参加し、まず仏に祈った後、すべてのナツ(111柱)を呼び出す儀礼を行ったと述べている(中村, 2014: 10)。
- (13) ナッカドーとは、ナツ信仰における巫女の役割を果たすシャーマンである。通常、女性であるが、村のナッカドーとは異なり、タウンピョンのような大きな儀礼に参加する職業的ナッカドーは、男性、特にトランスジェンダーな男性が担うことが多くなり、近年注目を集めている。しかし、このような傾向を経済的要因(経済制裁下のミャンマーで、社会的偏見を持たれているトランスジェンダーな男性たちが就労できる仕事に限られている)にあると考える見方も存在する。筆者の調査時では、開放経済後の好景気による就労機会の増加に伴い、ナッカドーを目指すトランスジェンダーな男性は減少しつつある、という声も聞かれた。
- (14) タウンピョンの兄弟が旅をしている途中、アマラブラのあたりで兎の肉を献上されて元気を回復したという故事になっている(中村, 2014: 12)。
- (15) また、スパイロはミンビューシンは37の公式ナツの一つであると述べている。しかし、ミンビューシンを含まない37の公式ナツの存在も認めている。
- (16) ボーボーギーは、寺院やバゴダ、町や集落の守護神とみなされている。高齢男性のイメージで、像はしばしば白装束で杖をついた姿で作られる。コートーン、ベイといった比較的新しいミャンマー東南部の都市では、その土地を開発し町を作った実在の人物がボーボーギーとして祀られていた。
- (17) 別の説では、ミンビューシンの本名はNga Pyiであり、国王の怒りをかい惨殺された人物であるという(Spiro, 1996: 95)。
- (18) 中村は、タン・シュエ政権時代(1992-2010)にもタウンピョン・ナツの奇跡が起こったと主張する村人の話を引用している。
- (19) 2012年2月22日、バガン、エイヤーワーディー(イラワジ)川流域での聞き取りによると、バガンでは、ガンジーシンという一対の男女の精霊が信仰されている。二人は兄と妹であり、船を守護する一種の「船霊」である。地域住民は、船(最近では、自動車も)を購入した際は、ガンジーシンの祠に報告し、供物を供える。ガンジーシン信仰は、船飾りによって示されるが、飾りは上下二重になっており、上の部分は仏への信仰、紅白二色の布を巻いた下の部分はガンジーシンへの信仰を表すと言う。また、古くなった布は、川に捨てるか、ガンジーシンの祠の周りに木に巻いておく。このガンジーシン信仰は、ガンジーシンという「精霊」の存在以外は、

タイやミャンマー東南部の船霊信仰と特徴が非常に良く似ている。このようなミャンマーの船霊信仰は、「ウー・シンジー」「ガンジーシン」と言った個別の精霊と結びついているが、広範囲な船霊信仰が先に存在し、その後に各地域の精霊信仰と関連付けられていった可能性がある（詳細は関,2015参照のこと）。

- (20) Violet Cho, “Thai spirits not welcome in Myanmar,” *New Mandala*,
<http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2013/04/19/thai-spirits-not-welcome-in-myanmar/>

参考文献

1) 日本語文献

- 池田正隆, 1995, 『ビルマ仏教—その歴史と儀礼・信仰』法蔵館。
- 池田正隆, 1997, 「仏教の受容と上座仏教」フジタ・ヴァンテ編『ミャンマー—慈しみの文化と伝統』東京美術, 124-137.
- 熊田直子, 1997, 「都市の精霊信仰」田辺繁治編著『実践宗教の人類学—上座部仏教の世界』205-212.
- 小松一彦, 2009, 『福の神と貧乏神』筑摩書房。
- 関泰子, 2014, 「タイ南部の船霊信仰」『立命館国際研究』26(4),143-166.
- 田村克己, 1993, 「見えない「国家」—ビルマの精霊信仰の語るもの」田辺繁治編著『実践宗教の人類学—上座部仏教の世界』195-220.
- 田村克己・根本敬編, 1997, 『暮らしがわかるアジア読本 ビルマ』河出書房新社。
- 土佐桂子, 1997, 「社会の中の女性、精神世界の中の女性」田村克己・根本敬編『暮らしがわかるアジア読本 ビルマ』河出書房新社, 137-144.
- 土佐桂子, 1997, 「ウェイザーの力」『暮らしがわかるアジア読本 ビルマ』河出書房新社。
- 土佐桂子, 1997, 「社会の中の女性、精神世界の中の女性」田村克己・根本敬編『暮らしがわかるアジア読本 ビルマ』河出書房新社,189-195.
- 中村羊一郎, 2015, 「ミャンマーのナツ信仰とナッカドー—タウンピョンとヤタナグの祭りを通して」『静岡産業大学情報学部研究紀要』17 (25) , 1-32.
- フジタ・ヴァンテ編, 1997, 『ミャンマー—慈しみの文化と伝統』東京美術。

2) 英語文献

D. G. E. Hall, 1955, *A History of South-east Asia*. London: Macmillan..

Scott, J.George, 1998, *Burma : A Handbook of Practice Information*, Orchid Press, Bangkok. (1921年版の復刻版。初版は1906年。)

Spiro, Melford.E, 1996, *Burmese Super-naturalism(Expanded Edition)*, Transaction Publishers, New Brunswick.